



Puzzle文集 5

目次

青い自転車 緑のアンブレラ	1
宍戸サレン・ガール	1
ロードムービー	4
もういいかい	6
子供のくらし	8
浴場狂詩曲	9
夢なんか観ない	11
ダンゴ虫	12
へび山とドブ川	15
浮世の馬鹿	16
グッドモーニング?	18
たまがわ	20
宍戸レイン・ドッグ	22
ちやりぼつ	24
腑抜けを気取って余裕をかます	26
蕭々たる霖	27
贗作ロックンロール	29
シャボン玉と少年と少女たち	31
宍戸★★★★★	32
エニウェイ	35
奥付	
奥付	38

青い自転車 緑のアンブレラ

青い自転車のサドルの後ろに緑のアンブレラを突き刺して、出発の準備は整った。

自転車の漕ぎ方ならば昨日身につけた。傘の差し方だって一昨日覚えたよ。

ペダルを踏めば青い自転車は出発する。ハンドルを捻ればそっちへ曲がる。ブレーキを握れば自転車は止まる。そこが下り坂ならばちょっとペダルを踏んでブレーキをギュッとすればいい。ちょっと進んでギュツ。ちょっと進んでギュツ。そこが上り坂ならば無理せず自転車を降りればいい。ハンドルを握って自転車を押すと、ペダルが足にぶつかって痛いじゃないか。左手はハンドル、右手はサドルだって？ そんなややこしい押し方をすれば、自転車は右にクルリと一回転。いつまで経っても進みやしない。俺は自分の身体に見合った坂の上り方を考える。押して駄目なら引いてみな。簡単なことだよ。俺は自転車の前に立ち、カゴを引っ張りながら後ろ向きに進んでいく。

この辺はやたらと坂が多くていけない。ようやく買ってもらった青い自転車。漕ぐ時間と同じくらい、押したり引いたりしなくてはならない。俺はようやく坂の頂上にたどり着く。見渡す限り曇天。でも、大丈夫。俺には緑のアンブレラがあるからね。一昨日は雨だった。そこで俺は何度も練習をしたんだ。アンブレラを握ってアーケードを歩く。そのトンガリは真っ直ぐ下に向けて。周りの人にぶつからないように。そして、アーケードの終点にたどり着いたら柄の部分の黒いボタンを押せばいい。バサッと音を立てて緑の屋根が広がる。何度も眺めたお気に入りの通勤電車と同じ色。鮮やかな緑のアンブレラ。そいつを掲げて雨の空へと踏み出していく。水溜まりを見つければ飛び込んだ。カタツムリを見つければしゃがみ込んだ。雨には雨の楽しみ方がある。

やあ、曇天。

この辺では一番小高い坂の上、俺は自転車の脇に立つ。そして、俺は待っている。辺りにたくさんの水たまりができる程の大きな雨を待っている。

宍戸サレン・ガール

「最近、毎日のように同じような夢を見るんだ」

宍戸は語りはじめた。

「何処かで見たとような可愛らしい女の子が狐を連れてこっちにやってくる」

「狐？ 犬でなく？」

「夢の中の俺はそいつを狐だと思っているんだ。で、狐は俺の名を鳴く」

俺の名を鳴く。その言葉にデジャヴ。

「息子っちいいい」

突然、宍戸は俺の息子を高く掲げながら雄叫びをあげた。驚いた細君は煮え湯を掻き回す手を止めた。

「いい加減名前くらい覚えろよ」

俺はため息。それでも息子は満面の笑みでされるがまま。宍戸の頭上で発せられる小猿のような声に彼女の口元も綻んだ。

宍戸が我が家にやってくることは珍しい。

これからそっちに行くから素麺でも茹でておいてくれ。

メールがあったのは10分前だった。鍋が煮え立つより前に宍戸が乗り込んできた。

「美味しいもんを買ってきてやったぞ」

鷲掴みにしたフードパックの惣菜を掲げて、まさか、万引きしてきたわけではあるまい。

「こういうのゲリラっていうんじゃないか？」

「なんだ？ 嬉しくなさそうだな」

俺は彼女の表情を伺い、曇りない笑顔に安堵した。

「久しぶりね」

「おう」

一人おとなしい奴がいると思えば、部屋の隅では小さな息子が人見知りを発揮。しかし、宍戸の強制力ですぐに打ち解けた。絶叫マシーンと化した宍戸は、息子を持ち上げては振り回す。駆け回る。子供がいないのに男児のツボをよく心得ている。

ダイニングテーブルに置かれたパックには「エビと枝豆のつまみ天」とシールが貼られている。冷たいビールを思い浮かべたのは俺だけか。宍戸は酒を飲まない。天ぷらには素麺。それも悪くない。

「できたわよ」

やがてザルにいっぱい素麺が運ばれてきた。

「おお、来た来た」

宍戸が息子を床におろすと、すね毛まみれの足にしがみついてもっとやれとせがむ。

「飯だぞ。席につけ」

俺が声をあげれば、宍戸は頓狂な声を出して足下を見下ろした。

「大した父ちゃんでちゅねえ」

まったく調子が狂う。

彼女は食器棚からソバ猪口を4つ取り出し、ダイニングテーブルに並べた。

「おろしたてのソバ猪口だぞ」

「俺のためか？」

「そうよ」

頬笑む彼女を余所に、俺はしかめ面の前で手を振る。

「宍戸君はお椀派？ 茶碗派？」

「派っ？」

「私の家は茶碗で素麺を食べてたのよ。でも、彼のところはお椀なんだって」

彼女は俺を指さし、珍獣でも発見したように目を丸める。

「で、喧嘩の末、ソバ猪口を買ったわけか」

宍戸は息子を抱え上げて背の高い椅子に座らせた。

「汗物はお椀だろ」

「主食なんだから茶碗よ」

彼女は宍戸に自分の椅子を差し出し、鏡台から自分の椅子を引っ張ってきた。

「さあ、遠慮せずに食べ」

そう言ったのは宍戸だ。思わず鼻が鳴るが、一番何もしていないのは実は俺だ。

「いただきますっ」

一際陽気な息子が場を和ませる。子供の力は偉大だ。俺は一口ソバを啜り、宍戸の手土産に手を伸ばす。

「美味いだろ？」

塩味のきいた衣でくるまれたエビと枝豆のかき揚げ。見た目から想像される味がそのまま口に広がる。

「確かに美味しい」

「だろ。俺のお陰だ」

宍戸は満足げに笑み、大量の素麺をすすり上げた。

「で、狐がどうしたって？」

「キツネ？」

宍戸が彼女と目を合わせて首を傾げる。

「毎日のように同じ夢を見るんだろ」

「ああ、毎日と言ってもここ二日ばかりな」

俺は噎せ返り、素麺を吹き出しそうになる。

「女の子はムスッと不機嫌な顔で押し黙ったまま。それで、狐は俺の名を連呼するんだ。それがそいつの鳴き声なんだな」

「よく分からん夢だな」

「いや。俺、昔あいつらに会ってるんだ」

「初恋の子か？」

宍戸は小さく首を横に振る。

「狐もいるのよ」

小さく縦に振る。

「あいつらさ、親父が布団で俺に聞かせた話に出てきたんだよ」

俺はなんとなく下顎をつきだし、彼女は眉を持ち上げた。宍戸は両手を強く結んで眉を垂らす。続いて、気色悪い裏声を響かせた。

「あなたがお話ししてくれないと私たちが消えちゃうわ」

すぐに息子の小猿のような笑い声が響いた。

以来、俺の脳味噌にも不機嫌な女の子と俺の名を鳴く狐が住み着いた。しかし、一点、残念なことがある。女の子が口を開けば、宍戸の気色悪い裏声が響くのだ。

ロードムービー

妙なTシャツ一枚でその男はロードを闊歩していた。Tシャツ一枚といったってズボンをはいているよ。恐らくパンツもね。なんだか冴えない男なんだ。二、三日風呂に入っていないように小汚い。デブだ。そして、まったく妙なTシャツだよ。胸には「愛犬」なんて書いてある。そして、出っ張った腹の上にはシーズーだろうか。毛むくじゃらの愛らしい犬がプリントされていた。

そのメッセージを読みとるのはなかなか難しい。愛犬家なのか。それとも、胸に You make me... と刻んだ空白世代の模倣か。なんだかパンクじゃない。なんて、途端にそのTシャツが宜しいものに見えてくる。男の残像が何度も過ぎり、いつしか俺はそのTシャツを買い求めていた。

こいつは程良く着こなしたい。程良く色褪せたブルージーンを程良く腰まで落とす。スニーカーも悪くはないけどね。エンジニアブーツもちょっと違う。やはりここはデッキシューズだろう。七〇年代NYパンクス。パンクはスタイルじゃねえんだよ。アティチュードなんだよ。なんて言ったのはUKパンクスだけど、スタイルの悪さに関しては抜群にNYパンクス。だから、俺の胸には「愛犬」Tシャツ、足下にはホームセンターで買ったデッキシューズ。

買った頃の頃はしんどいね。おろしたての真っ白なデッキシューズに可愛いシーズーのTシャツだ。ファッションに無頓着なお父さんだって気付くだろう。

「ヤバいな、これ」

みんなが笑っているようだ。俺は逃げるようには歩き出す。今、咳込んだおまえ、笑いたきゃ笑えばいいだろう。

俺は男の背中を探し求める。ロードを歩き、デッキシューズを削る。排気ガスを浴びて、黄砂を浴びて、PM2.5を浴びて、三日もすれば俺の「愛犬」Tシャツもいい塩梅になってくる。その頃になって、ようやく男の背中に追いついた。

「よう」

声をかけると男は振り返る。死んだような目が多少見開かれる。眼球が涙の中で泳ぎ出す。同じような格好の小汚い俺が目の前にいる。男は戸惑いを隠せない。俺が手を挙げると男はそれに呼応する。そこですかさずハイタッチ。俺たちは肩を並べて歩き出した。

これがムーブメントのはじまりだ。

「やあ兄弟」

男から応答はない。小刻みに頷きながら、俺から逃げるように歩き続けた。男は自分がムーブメントの先導者であることに気付いていない。それどころか、いきなり現れた俺のことが不愉快で仕方ない。俺もだよ。こんな冴えない男にそんな目をされて何が楽しい。でも、ここからが肝心だ。すぐには何もやってこない。胸に「愛犬」の小汚い男が二人。多くの者は無表情で小さく首を傾げるだけだ。肩間に皺を寄せて不快感を表す奴がいれば、そいつにはまだ見込みがある。

でも、まずは「愛犬家」だな。犬を連れた小綺麗なマダムを間に挟むように俺はポジションをとる。するとどうだ。犬を連れたマダムの両脇に「愛犬」と書かれた冴えない男二人。もう無表情で首を傾げてなどいられない。誰もが目を丸めて振り返る。ここで気を付けなくてはならないのは、如何にしてマダムを逃がさず取り込むか。

そこで、俺は腹に描かれたシーザーを指さして呟いた。

「犬を探しているんです」

「まあ」

マダムの応答に、俺はサクセスの予感。

「なあ兄弟！」

声を上げて、男に呼びかける。マダムが男の顔をのぞき込む。男は小さく目配せしつつ、なおも小刻みに首を揺らす。多少の効果はあったか。

通学途中の学生の群に潜り込み、一人を釣り上げる。通勤途中のサラリーマンの群に潜り込み、三人を釣り上げた。非日常を求める輩はいくらでもいる。

「なあ兄弟！」

俺は同志を釣り上げる毎に声を上げる。

「おう兄弟！」

中には理解あるサラリーマンもいるもんで、ムーブメントに加わるなり途端に共鳴しはじめた。俺たちは兄弟であるという連帯感ができあがる。続いてのアクション。俺たちは若者の集う繁華街へと繰り出した。

肩間に皺を寄せて不快感を表すプロスペクトを見つければ、俺は先導者たる男を突き飛ばしてそいつに激突させる。倒れ込んだプロスペクトを引き起こしてムーブメントに引きづり込む。そして、日本シリーズ制覇さながらの胴上げをはじめた。

繁華街を闊歩しながらプロスペクトを突き上げる。俺が「なあ兄弟！」と声を上げれば、サラリーマンはドスの利いた声で「おう兄弟！」と呼応する。「なあ兄弟！」「おう兄弟！」と繰り返していれば、不機嫌なプロスペクトから否が応にも笑いがこぼれる。そうなればサクセスだ。俺たちはそいつを取り込み、次なるプロスペクトへ狙いを定める。

なんだか変な集団が、次々と若者を突き上げては輪に取り込んでゆく。最新型の遊びを見つけたように若者たちが吸い寄せられる。もう俺のやるべきことはない。先導者た

る男はいつしか自ら狙いを定めて突進し、次第に大きくなるムーブメントが若者たちを引きづり込む。男は次第にいい気分になっちゃって、雄叫びをあげながら突進しまくった。

俺にはその声がとても不愉快だった。次第に不満を募らせる。先導者たる男が俺に与えるインパクトはもう何もない。

ムーブメントから少し飛び出せば、徒党を組んで闊歩する俺たちに見向きもせず街灯にもたれる若者一人。裏声で「グリーングリーン」を歌っていた。

ある日パパとふたりで語り合ったさ この世に生きるよろこびそして悲しみのことをグリーングリーン 青空にはことりがうたいグリーングリーン 丘の上にはララ 緑がもえる その時パパがいったさ～♪

そして、俺はフェードアウト。

もういいかい

大阪出張の帰り「のぞみ」五二号東京行き。車内で弁当を食うことを好まない俺は、新大阪駅構内でラーメンを啜って新幹線に乗り込んだ。通路寄りのC席。会社支給のノートPCを開いてメールをチェックする。金曜日は比較的社内外からの問い合わせが少ない。緊急性のあるものにだけ返信してPCを閉じた。あまりマメに返信していると、レスのいい奴だと認識され、何かと面倒だ。

スマートフォンを開いて、気になる人物のツイートを一通り確認。続いて、一冊の本を取りだした。

「恋する原発」

発売されて間もなく図書館で予約した本がようやく回ってきた。挑発的なタイトル。三六〇度過激な内容。そして、著者特有のエロ、エロ、エロ…。通勤電車で読むには度胸が試される。これは文学作品ですから。己に言い聞かせ、肩間に皺を寄せて小難しい顔をする。それでも、頁を全開にする勇気はなく、直角に開いて顔を寄せる。多分な雑念や自意識と格闘しながら、どうにか読み進めた。帰りの新幹線で読み終えるつもりだ。

京都駅にたどり着くと、困ったことが起きた。金曜日の夜ともなれば車内は満席に近い。三人掛けのB席に女性が割り込んできたのだ。俺は両手で開いていた本を、親指一本挟んだ片手持ちに切り替える。四五度まで本を閉じて、さらに肩間を力ませた。

女は席に着くなり一冊の本を取りだした。グレー色の地味な装丁、ブルーの文字で打たれたタイトルがなんだかお洒落じゃない。

俺は「震災文学論」の章を読み終えたところで、一度、本を閉じた。膝の上には、UK

パンクか関西パンクかと思紛う末期色、否、真っ黄色の装丁。表紙を伏せれば中指を突き上げる男のシルエット。

やがて車掌が現れた。俺は胸ポケットからチケットを取り出す。しかし、検札をしている様子はなく真っ直ぐに歩いてくる。よく見れば「神奈川県警」と書かれた制服警察官だった。なにごとか。N700系の東海道区間最高速度は時速二七〇キロ。こんな閉鎖空間で事件なんて堪らんぞ。しかし、車内巡回とは限らない。容疑者護送中の一人が便所に立っただけかも知れない。それにしても、お腰に付けた拳銃をちらつかせて物々しい雰囲気が漂う。

俺は基本的に新幹線移動というものが好きだ。本州である限り何処へ行くにも陸路を選ぶ。新幹線が好きと言うより飛行機が嫌いなのだ。鉄塊が宙を舞うことへの不信感もさることながら、空路の特別扱いが気に入らない。電子機器、通信機器の使用制限。ハサミー一本許さない持ち込み制限。出発一五分前過ぎたら有無を言わず閉ざされる保安検査所。乗り損なう不安感を煽り、不便な思いをさせておいて最後には決め台詞。

「快適な空の旅をお楽しみください」

シバクゾワレ。大阪帰りなもんで、ついつい。それとも電車があまりにも無防備なのだろうか。エーネツヤカ・ダーヴァナ・パンニャッターが、スマンガラが相次いで捕まり、再び呼び起こされる記憶。

テロル テロル 子供の時にだけ あなたに訪れる 不思議な出会い

妙ちくりんな歌が頭を過ぎり、俺は頭を振るってそいつをかき消した。

隣の女はすでに本を閉じて眠りについていて。俺は再び本を開く。物語はついに最終章。

メイキング☆7 ウィー・アー・ザ・ワールド。

便所を終えた(?)警察官が帰ってきた。通路側のシートにもたれた俺の目の前を拳銃が通過する。手を伸ばせば奪い取れそう。

「だるまさんがころんだ」

大声で叫んだら立ち止まるだろうか。週末、覚え立ての息子と日が暮れるまで遊んだのだ。あまりの大きな声に恥ずかしくもなるけれど、遊び方を覚えることが何より大事なこの時期、こっちも本気で挑まなくてはならない。

「だるまさんがころんだ」

大声で叫んだら驚いた拍子に拳銃を引き抜いて銃口を向けるだろうか。あんたが探しているのは俺かもしれないぜ。

それにしても、ウィー・アー・ザ・ワールド。クライマックスになれば、USA・フォー・アフリカを凌ぐ豪華ゲスト陣で、俺の眉間は力みっぱなし。脳味噌が圧迫されて目眩がする。原発に対して「反対」とも「推進」とも意見が持てない俺は、エンターテインメント作品としてしか読むことができない。ごめんなさい。どちらかという、昔からCO2問題の方が関心あるんだよね。

「じゃあ、推進派？」

隣の女が不意に目を覚ました。

「いやあのそのあの」

驚いた拍子に俺は女の首を絞めて揺さぶり始める。

子供のくらし

清貧なんていう言葉がある。電子辞書（明鏡国語辞典MX）を叩いてみれば、「私利を求めず、行いが正しいために、その生活が貧しいこと」とな。

美しいじゃない。清いじゃない。さあ、今すぐ仕事を放棄しよう。

私利など求めた覚えはない。投げ出すことが正しい行いではない。分かっている。生活は優雅とは言えないが、かと言って貧しくはないだろう。多少の娯楽を享受できる程度の収入を、必死に稼いで生きている。割と清いでしょう。

冒頭に取り上げておいて申し訳ないが、清貧は却下。忘れてもらいたい。

乞食になりたいと言っていた親父の言葉を思い出した。それ、息子に聞かせる言葉か？ 臍齧り虫だったあの頃、なんて馬なことを抜かす鹿親父だと呆れた。今となれば分からないでもない。分からないでもないのが残念でならない。

最近読んだ本から。

「それじゃ人間ってのは何だっていうと、要するに子供がいちばんの基準だと思いますね。子供って、一日二四時間、全部遊びじゃないですか。生活イコール遊びなんですよ。あれが理想でね、そいつを歴史になぞらえてみると、未開原始の社会と同じなんですな。（悪人正機／新潮文庫）」

未開原始の社会というのは、狩猟、採集の生活ということかしら。それって、現代で言えば親父の理想じゃない。無理無理、実際。

清貧なんて阿呆かつ。

乞食なんて無理無理っ。

苦勞が美しいとは微塵にも思っちゃいない。俺は考えている。どうしたら楽しく生きていけるのか。そこんどこ、実際、もう少し真剣になって考えるべきではなからうか。何故、苦勞を強いられる日々を受け入れて生きていかなければならないのか。

「楽しければ己を高めろ」

そうね。あんたの言うことは一理あるけれど、疲れたよ。あっちの山なら駆け上がれそうな気もするが、目の前は断崖絶壁。エブリデイ絶壁と向き合い、そして、俺は途方に暮れる。見上げはしても、手足をかける気にはなれない。

「俺、案山子なんだ」

正確に言うと、案山子が職業。俺の職業が案山子なんだ。麦畑のキャッチャーより田圃のスケアクロウでありたい。一次産業に携わるって素敵なことだろう。英語で言うとなんとも格好宜しいね。

ネクタイを締めて、身支度を整える。毎朝、可愛い HONEY に見送られて俺が向かう先は田圃。満員電車で揺られて、勤務地に辿りつけば汗だくのスーツを脱ぎ捨てる。白いタンクトップに着替えて、麦わら帽子と軍手を身につける。

そして、俺は田圃の真ん中に立つ。両手を広げる。

「ご苦労さんだねえ」

トトロの婆さんみたいな女に優しい声をかけられ、俺は小さく会釈する。

雀の群が現れれば全力で退治する。ただ立っているだけなら竹で作った案山子でいいだろう。こっちはプロなんだ。これでおまんま食ってんだ。俺は全身全霊でなまはげさながら。大声を張り上げる。田圃を練り歩く。

「動くのかよっ」

そりゃ雀も驚いて逃げる。

日が暮れば、俺は再びスーツに着替える。疲れ切った身体を吊革にぶら下げて満員電車で揺られる。家に帰れば、スリッパを鳴らしながら可愛い HONEY が現れる。

「おかえりなさい。今日はどうだった？」

「ざっと三〇〇羽ってところかな」

なんて理想を妄想。

こんな歌を口ずさみたくなる。ガールズバンドの最高峰♪

だから HONEY 天使の KISS が胸にとけて涙がほら こぼれる

Oh yes my HONEY このときめきを 時間よりも空気よりも 確かな

Oh yes my HONEY 広い夜空に やさしい目と強い腕を みつけた

そして HONEY あなたがいれば 雨の日でも風の日でも 地球はまわるよ

だから HONEY、

そんな切り口で言い訳したい気分なんだ。

俺は君にかまける。

すれば苦労を苦労とも思わない。

自己暗示だよ。

子供の暮らしにはほど遠い。

浴場狂詩曲

大浴場のあるホテルが好きだ。

みんなでワイワイ入りたいのではない。出張続きの身体には何よりデカイ風呂だろう。

出張先のホテル条件。部屋にLANが引かれていること、朝食付きプランであること、それに続くのが大浴場だ。温泉にしろとは言わない。只の湯が好き。全身を磨いたら身体を伸ばしてたっぷりの湯に浸かりたい。

単身の夜に酒はやらない。その日も日没前に夕飯を済ませて部屋へ戻った。はじめて泊まるホテルだった。俺は利用案内をめくる。大浴場の営業開始は一九時とな。二時から二時には混雑が予想されるとな。それならばと、俺は営業開始に合わせて風呂へ向かった。

番頭というべきか、大浴場の暖簾をくぐれば、珍しく受付スタッフがいた。ルームキーを預けてロッカーの鍵を受け取る。さらに男湯と書かれた濃紺の暖簾を割ると、プールの更衣室かと思紛う風情。壁二面に金属製のロッカーが並んでいた。味気ない。風呂屋は木製の棚に竹で編んだ籠が突っ込まれているもんだらう。

ここは本当に脱衣場かしらん？

一枚ずつ服を脱ぎながら次第に不安が込み上げた。全裸になって次の部屋に入れば、そこが脱衣所だったなんて経験があったからだ。

ここは貴重品用のロッカーかしらん？

俺はパンツ一枚になったところで次へ続く扉に手をかけた。首を突っ込めば、そこは間違いなく浴室だった。既に白髪の爺さんが湯に浸かっている。ぼんやりと天井を見つめて、時折、湯面を撫でる。昨日の晩から浸かっているのではないかという風体だ。

残念ながら大きな風呂を独り占めとはいかないようだ。俺は小さなため息とともにパンツをロッカーに放り込んだ。

煙の立ちこめる浴室。はじめに備え付けの全身シャンプーで文字通り頭から足先まで全身を磨く。そして、センターを陣取る爺さんに目を合わせることなく、浴槽の隅に身を沈めた。

大浴場の主のような爺さんから話しかけてくる様子はない。さすがに昨晚から浸かっているわけではなかろう。おそらく、俺と同様、誰もいないと見込んで営業開始に合わせて来たのだ。見ず知らずの男とのコミュニケーションなど望んではないだろう。

浴場には、よく耳にするが、題名の分からないクラシックナンバーが流れていた。

タラリラ タラリラ ランランラン♪

無言で肩を並べる爺さんとおっさん。軽快に流れるナンバー。

タラリラ タラリラ ランランラン♪

あえて歌詞を付けるとしたら、

マサ男と マサ子が 飛んでった♪

なんて思いついたら最後、いつまでも意味不明な歌詞がループする。距離を置いて肩を並べる無言の爺さんとおっさん。俺は「マサ男とマサ子の歌」を口ずさんでやろうかと企む。

「ヒぬっ」

変に意識していたら、鼻から漏れた。俺は横目で爺さんを見る。爺さんは見たところ耳順の60代。俺の不可解な発音に反応を示す様子もない。「ヒぬっ」は「ヒぬっ」であって「ヒぬっ」以外のなにものでもない。不惑の40歳にも満たない俺とは貫禄が違う。耳が遠いだけか？

それにしても爺さん、いつになったら湯からあがるのか。後から入ってきた俺が先に
出てしまうのはどうだろう。嗚呼、はやく不惑の四十路を迎えたい。

「おい、若いの」

なんて声でもかけてこいよ。

「そんな若くないっすよお」

ひとしきり当たり障りのない会話をして、「じゃあ、お先に」なんて湯から出るのだが。

再び横目で様子を伺えば、あれ、背中を向けていやがる。なにになに？俺がチラ見する
から背を向けたわけか？何も好き好んで裸の爺さんを見たわけではないぞ。

あんたがそんな態度なら俺はもう出るよ。なんて憤りをステップに俺は湯をあがる。
しかし、この風呂を先に出る際の敗北感はなんなのだろう。

夢なんか観ない

目を閉じる。続いて目を開けばもう朝だ。眠りが深いのか、最近では夢なんか観ない。
夢を観ない夜など無いのだと聞いたことがある。覚えていないだけなのだとか。結果的
には一緒だろ。

休日の寝室はカーテンを締め切る。朝日とともに目を覚ます子供に叩き起こされない
よう防衛策だ。しかし、俺は六時になれば目を覚ましてしまう。習慣というやつだ。休
日であることにホッと一息。傍らには健やかな寝息をたてる幼子。カーテンの隙間から
薄ぼんやりと漏れ込む陽光。あまり天気は良くなさそうだ。

日曜日の朝は少々憂鬱だ。寝坊ができるのも今日で最後。もう少し寝ていようか。そ
れとも一人の時間を満喫しようか。昨晚は子供を寝かしつけている間に眠ってしまった
ようだ。お陰で睡眠時間は十分だ。

以前、同僚から聞いたことがある。ヒトの睡眠時間は六時間でなく、パソコン時間
でなく、七時間がベストなんだとか。理由は忘れた。理由など尋ねなかった気もする。そ
れすら忘れた。どうせ九時間近く寝たのだから関係ない。

最近、どうも物忘れが酷い。覚えていようという気力が萎えている。夢を観ないのはそ
のせいか。

小さい頃は確かに夢を観た。繰り返し観る夢もあった。小学生の頃であれば、大きな公
園で置き去りにされる夢だ。目の前には鮮やかな緑と青。よく晴れた広い芝生の公園だ。
俺は金縛りにあったように身動きがとれない。声にならない叫びは誰にも届かず、両親
の背中では遠ざかってゆく。

中高生になると、よほど眠たかったのだろう。母親に叩き起こされて飯を食う。そして、電車で揺られて学校へ向かう。担任の教師が現れたところで、再び母親に叩き起こされた。言葉にするとややこしい「起きたはずだったのに」という夢だ。

最後に観た夢は何だったろうか。今度はいつ夢を観られるだろうか。

あ、そうだ。

昨日、蔦屋でDVD借りたんだよな。

なんだか気になる芸人が監督・主演していた脱獄映画。前々から気にはなっていたのだが、いつか観ようと思うだけで、なかなか手に取らないでいた。すると、先週借りたDVDの中にその映画の予告編が入っていた。ナントカ賞受賞だそうで、その賞の価値など知らないが、その「賞」に弱い。朝っぱらからお笑い映画鑑賞もどうかと思うが、俺はそっと寝室を抜け出した。

未だ一四型ブラウン管テレビに地デジチューナーをつないでいる我が家。DVDを観るのは専ら一九型モニターのPCだ。起動を待ちながら湯沸かし器に水を入れる。コーヒーが飲みたいところだ。

会社に入って間もない頃、同時期に入社した中途社員から聞いた話を覚えている。コミュニケーションスキルトレーニングの中で、お互いの趣味に関する会話をした時のことだ。

「趣味は、夜な夜な起き出して自分の時間を楽しむことです」

まだ二〇代だった俺には思いも寄らない回答だった。

「何するんすか？」

ご家庭に何か問題があるのではないかと訝ったが、そうではない。

「何でもいいんだよ」

そうではないことが今では分かる。

液晶モニターに映し出される暴力的で気味の悪い映像をぼんやり眺めながら、一〇年も昔ことを思い出していた。

まだまだ起きてこなくていいよ。

でも、必ず起きておいで。

おそらく先に起きてくるのは子供だろう。「おはよう」と声をかけて、優しく抱き上げよう。もし、彼女が先に起きてくることがあれば乱れた髪をそっとなでて、やはり優しく抱きしめよう。

でも、まだゆっくりおやすみ。

ダンゴ虫

ある朝、なにか気がかりな夢から目を覚ますと、自分が枯れ草の中で一匹の小さなダンゴムシに変わっているのを発見した。俺は鎧のように固い背を下にして、仰向けに横たわっていた。頭を少し持ち上げると、無数の足が規則的に蠢く腹が見える。胴体の大きさに比べて、足はひどくか細かった。

「おえっ」

俺は気味が悪くなり空を見上げる。覆い被さる枯れ草を無数の足で蹴り払えば、バックベアードが見下ろしていた。俺は驚いて身を丸める。

神経の隅々までダンゴムシに成り果てたようだ。反射的に身を守る最良の手段を選んでた。嘔みつくことも、叫ぶこともできない俺は、身を丸めて、危険が過ぎ去ることを待つ以外にない。

バックベアードは何をする様子もない。その目を見れば、目眩を起こす、催眠術にかかるなどと言われているが、見なければいいのか。しかし、いつまで丸くなっていけばいいものか。

俺は暇を持て余し記憶を辿る。なんでダンゴムシなのか。

昨日は仕事を終えた後、週のはじめにもかかわらず同僚と酒を飲んでた。ほろ酔い気分で帰路についたはずだが、布団に潜った記憶がない。

「草に埋もれて寝たのです♪ところ構わず寝たのです♪」

そんな歌を口ずさみながら夜道を歩いていると、末はミミズかダンゴムシかなんて妄想にとりつかれた。さほど酔ってはいないのに、足下は右へ左へフラリフラ。やがて道を大きく逸れて緑道へ転げ落ちた。俺は土を噛む。いっぱい息を吸い込んで、星空へと仰向けになる。土の臭いと冷たい感触。そのまま心地よい眠りについたのだろう。

ところで、今日は火曜日だぞ。

不意に同行予定のエンジニアや先方の顔が浮かびウンザリする。少々体を開いて自分の体を眺めれば、溢れ出す足と足と足と...

「おえっ」

ダンゴムシにどうしろと言うのだ。どうにもならないと開き直れば、少し気持ちが楽になった。

見上げれば未だ大きな目が俺を見下ろしている。それはバックベアードなどではない。無垢で大きな瞳。ダンゴムシ最大の敵、小僧であった。小僧は小石やダンゴムシをつまみ上げては、また地面に戻す。やがて、その指先がこちらに伸びてきた。俺は再び体をきつく結んだ。

優しい指先が俺をつまみ上げる。続いて、手の平だろうか温かいベッドの上に転がされた。どこか覚えのある温もり。続いて、聞き慣れた甲高い声が聴覚器官を劈く。

「パパっ」

ダンゴムシと親父を間違える奴があるかっ。一瞬カッとなってから、ふと我に戻る。確かに親父はダンゴムシだ。

なんだ？ おまえには分かるのか？

俺は体を開いて、息子の手の平を這い回る。喜んでいるのかくすぐったいのか、俺を見下ろす大きな瞳が眩しい。続いて、俺を乗せた手の平が高く持ち上げられた。

「ほらっ」

すると、目の前に現れた巨大な妻の顔。眉をひそめた彼女と目が合う。

「や〜め〜て〜よ〜」

だから、ママは虫が嫌いだって何度も言ってるだろ。彼女は息子の手首を掴んで押し戻す。

「パパだよ」

「バカなこと言わないの。もう行くよ」

続いて、掴んだ手首ブルブルと振り始めるではないか。

何をするっ！

俺は必死になって息子の小指にしがみつく。しかし、こうも手足が多いと、どれに力を込めたらいいのか、その配分が分からない。ついに俺は枯れ葉の上に落下。跳ねた拍子に丸くなる。そして、枯れ葉の影に転がり込んだ。

まったく虫けらの扱いなんて酷いもんだ。外骨格でなければとてもやっていけない。

それにしても、あいつは俺がいなくなったことを何とも思っていないのか。確かに皆が眠った後に帰ってきて、起き出す前には家を出る日々。週末でもなければ、俺を見なくとも不思議ではないのだろう。ならば、しばらくダンゴムシを楽しむもいい。

バックを提げた小僧は登園中か。俺は妻子の背中を見送り、枯れ葉の隙間を縫うように進んでいった。

一、二、三、四、五、六、七。

一、二、三、四、五、六、七。

なるほど、足は片側七本の一四本。

腹が減ったら枯れ草に噛みついてみる。土の臭いが食欲をそそる。続いて、土に成り果てた腐葉土をかじる。

なるほど、なんでも腐りかけが甘い。

しかし、肉食虫でなくてよかった。ハチノコもイナゴも食ったことがない。虫食いはちょっと嫌だなあ。蟬を食う猿を見たときもギョツとしたよ。

すると、目の前には肉食虫。

なるほど、厳しい世界だ。

噛みつくことも、叫ぶこともできない俺は、身を丸めて、危険が過ぎ去ること待つ以外にない。立ち向かう術は持たず、ただジッと身を丸める。それは俺の性分に合っているようにも思える。

この危機を乗り越えることができたなら、少しは考えておかなくてはなるまい。週末までにどうしてもとの姿に戻るべきか。この生活が心地よくなってしまふその前に、早く考えはじめた方がいいだろう。

ヘビ山とドブ川

ヘビ山と呼ばれる空き地があった。ヘビが巣を作る山という意味であろうが、ヘビに遭遇したことはなかった。建設工事を途中で止めてしまった様に盛り土されていたが、山と呼ぶほどのことはない。雑草の生い茂るやや小高い空き地だ。

どこかの親御さんがいい加減なことを言ったのだろう。

「あそこはヘビが出るから遊んじゃいけないよ」

それから空き地はヘビ山と呼ばれ、少年たちには少し危険な遊び場として認知された。盛り土のお陰で雑草は深く根を張るのだろう。身の丈以上もあるセイタカアワダチソウが繁茂していた。

「ヘビ山に行こうよ」

下校途中でトモダチは言った。俺は顔をゆがめて眉をひそめる。すると、トモダチはすかさず意地悪い顔で微笑んだ。そうなれば、こう答えるしかないだろう。

「もちろん。行こうぜ」

俺たちは市営グラウンドで一度別れて、それぞれの家へ駆けていった。

昨日は、ハムを一枚持ってドブ川へ行った。半分は自分で食って、残りを尻糸に結んだ。ザリガニを釣るためだ。一匹釣り上げると、尻尾を引きちぎって殻を剥いた。そいつを尻糸に結べば、二匹目が釣れた。仲間の肉を食うなんて、いったい何を考えているんだろう。

俺は次々にザリガニを釣り上げていった。小さなバケツにはたくさんのザリガニが蠢く。

やがて一台の軽トラックが砂利を弾き飛ばしながら、俺の背後を抜けていった。途端、トモダチの甲高い笑い声が響く。驚いて振り向けばトモダチは気が狂ったように飛び跳ねていた。その足下には潰れたザリガニが一匹。

「はじまったよ」

俺はため息をついて小さく呟く。トモダチはちょっと頭がイカれてんだ。俺の釣り上げたザリガニをバケツから拾い上げ、通り過ぎる車の前に放り投げる。ザリガニはなす術なくタイヤに潰された。

いったい何が楽しいのか。俺にはまったく理解できない。とても見てはいられず、視線を竿に戻す。すると、尻糸の肉が外れて川底に沈んでいた。俺は舌打ちを一つ。バケツのザリガニに手を伸ばし、その尻尾を引きちぎった。

俺はランドセルを下ろしてまた家を出る。そして、トモダチの家へ向かった。

その家のベランダにはいつだって真っ赤な看板がかけられていた。大きな文字で名前が書かれ、オッサンの写真が張り付いている。はじめはお父さんなのだろうと思ってい

たが、考えてみれば苗字が違う。学年を重ねるに連れ、それがセイジ家の写真だと言うことが分かってきた。

トモダチは笑顔で俺を迎えた。不意に潰れたザリガニが思い浮かび、気分が悪くなる。俺は極力目が合わないように肩を並べてヘビ山へ向かった。

「この前、ヘビに噛まれたんだよな」

嘘を言うようなヤツではなかった。

だから、なんだ。

だから、いいヤツってことはない。

「毒とか大丈夫なの？」

「すぐに吸い出したから大丈夫さ」

そういうものなのか。俺は判断しかね、曖昧に頷いた。

「今度見つけたらちょん切ってやる」

トモダチは裁断バサミを握っていた。俺は輪切りになったヘビを思い浮かべ、また気分が悪くなった。

そんなトモダチだ。いつまでも長くは続かない。子供の頃は近所に住んでいるというだけでトモダチだった。でも、いつしかフェードアウト。

一〇年くらい経ったろうか、トモダチから久し振りに電話がかかってきた。

母親から受話器を渡され、その名を聞かされた時、俺は随分驚いた。

「久しぶりい。元気してる？」

受話器の向こうでトモダチの狂った笑顔が浮かび、随分と懐かしい嫌悪感に浸る。同時に俺の中にはある種の期待感が存在していた。

何かとんでもない男になっているのではないか。

しかし、その期待はすぐに裏切られた。あんなに尖っていた俺のトモダチだったのに、なんだか随分と胡散臭いじゃないか。

「選挙もう行った？」

だってよ。

浮世の馬鹿

世の中に 寝るほど楽はなかりけり 浮き世の馬鹿は起きて働く

蜀山人さながら世間に目を細めて詠ってみたいもんだが、我こそは浮き世の馬鹿。せめて盆休みくらいは、阿房が酔に酔ったように過ごしたい。

合皮の張られた椅子に腰掛けて珈琲を啜る。何もするまいと決めた休みだが、馬鹿に尻が蒸れて不快でならない。何もしないとなれば、何もしない空間が快適でないと、とても何もしないでいられない。

珈琲を冷やして飲むのは味を知らない日本人の悪習だ。阿房の話しぐいと言われようと、俺は汗ばむ首筋をかきむしりながら湯気の立つ珈琲を啜る。

何もしないでいられないなら、何か関心事に没頭すればいい。しかし、俺の関心事とはいったいなんだ。

「まったく俺は何のために日々過ごしているのかねえ」

大袈裟にため息をついて阿房桁叩く。日々、何を楽しみに、何を探求しながら生きているのか。何に対しても無関心な俺は己の欲求を知らない。

何か夢中になれるものはないかしら。仕事帰りには本屋に立ち寄った。日本の歴史でも勉強してみようかしらと一冊の本を手取る。冒頭数行で夢中になれなければとても読了できる気がしない。毎度、二〇秒の立ち読みで店を後にした。思えば初任給で広辞苑を買って以来、本屋で金を払った記憶がない。

何もする気がしないなら、阿房の鼻毛で蜻蛉をつなぐか。

「嗚呼、尻が痒い」

目下、俺の課題は尻の蒸れ。

「この際、尻に着目して、俺の関心事としてみようか」

馬鹿も休み休み言え。

何処からか声がしそうだが俺の盆休み、馬鹿面で阿房だら口叩こうと俺の勝手。

考えてみれば、己の尻など余程の軟体人間でなければ生涯拝むことすらできない。椅子に腰掛ければ、まさに陰ながら俺を支えている。尻に関心を持つのは悪いことではない。

俺は広辞苑を引っ張り出し、尻について調べてみる。「しり」、「けつ」、「でんぶ」など俺の知るだけでもいくつか呼び名がある。

でんぶ【臀部】。ただ一言「しりの部分」とある。確かに字の如くである。

けつ【穴・尻】。「(俗に)しり」とある。確かに響きが俗っポイ。

つまり、「尻」は本来「しり」なのである。

しり【尻・臀・後】を見れば、そのほか、いさらい【尻・臀】、いしき【居敷】、おいど【御居処】などという呼称があることを知る。「いしき」、「おいど」に関しては、座するところとしての「しり」を意味している。中でも「おいど」は丁寧な言葉遣いであり、もともとは女房詞であったそうだ。

さらには、尻の左右に分かれた肉付きの豊かな部分に関しては【尻臀】と書き、「しりこぶた」、「しりたぶら」、「しりたむら」、「しりべた」、「しりむた」と読み方は様々。

尻とは、臀であり、穴であり、後であり、居なのだ。

「面白いじゃないの。しり」

俺はその豊かな尻世界に感動すら覚えた。

是非、場面に応じて使い分けたい。「でんぶ」はあくまでその部分であり、ファンクションを話す上では「しり」なのだ。「けつ」はやっぱり親しい間柄だけだね。特に、女性の前では「おいど」なんて言ってみたいものだ。

「嗚呼、言ってみたいぞ。おいど」

いつしか「しり」の話題になったなら、馬鹿の一つ覚えのように俺は「けつ」だ「おいど」だと使い分けてみせるのだ。

何気なく尻に手を伸ばせば豊かな肉。途端にため息が漏れた。

肉体の生長が止まってから随分経つ。あとは老いていく一方だというのに、俺の身体は未だ膨れ続けている。汚物に満ちて、今にもあふれ出しそう。俺はまだ若いなどと言いつつ聞かせても、鹿を指して馬となすようなもの。植物が干からびていくように老いてはいけないものか。

尻を摘む。腕を摘む。腹を摘む。

何処を摘んでも肉、肉、肉。

阿房の三杯汁を繰り返した挙げ句の成れの果て。

馬鹿に付ける薬は無い。

馬鹿は死ななきゃ直らない。

先人たちは言い得て妙な言葉を幾つも残してくれた。

俺は意を決して立ち上がる。

「踊る阿呆に見る阿呆同じ阿呆なら踊らにゃ損々！」

肉に対するささやかな抵抗。微力は無力でないと誰かが言っていたよ。

俺は列をなす阿呆を思い浮かべながら踊り狂った。

グッドモーニング？

金曜日の夜だというのにまたしても残業だ。最後まで残っていると灯りやら空調やらを切って廻らなくてはならない。ビリにはなるまいと黙々と残務をこなし、なんとかブービーで切り抜けた。

「お疲れさま」

未だPCに向かう同僚に気を使っているという体で小声で頭を下げる。内心はガッツポーズ。そして、逃げるように事務所を後にした。

様々な亜細亜人が行き交う繁華街。足早にすり抜けて駅へと向かう。途中、女が携帯電話を握ったまま泣いていた。どうしたもんかと少々減速。耳を敬てながら素通りするが、涙に滲んだその声が何を語っているのか分からなかった。日本語でなかったかもしれない。

金曜の夜こそ早く家に帰りたい。

可愛い女が待っている涼しい部屋でビールを飲む。その前に風呂だな。そして、風呂

上がりにまず一缶。

「笑顔の素敵なたった駅員さんって何ともニクいよね」

女は一日の出来事をたっぷりと語り、俺は上の空でもう一缶。そういや泣いている女がいたなあ。なんてことを思い返しながらグラスに安い焼酎を注ぐ。氷を鳴らす。

金曜の夜はいいね。実にいい。明日のことなど気かけず、俺は呑気に氷を鳴らす。焼酎を継ぎ足して、継ぎ足して、最後に残った僅かな氷を齧る。夜は更けていく。

カーテンを揺らす風。いくらか暑さも和らぎ、心地よい朝。

穏やかな光に包まれたベッドルームでは女が寝返りをうつ。続いて、瞳にうっすら光が射した。

「おはよう」

傍らで腰を下ろす俺は優しく微笑む。

きめ細かい肌。乱れた髪。

不意に浮かび上がる眉間の皺。それはみるみるうちに深く落ち込む。大きな欠伸とともに女は物の怪の様相になる。そして、その顔には極太マジックでこう描かれていた。

ワタシハトテモフキゲンダ。

メドゥーサに睨まれた哀れな男は瞬時に石化する。

何だっけ？

俺、何かしたっけ？

昨日、何かあったっけ？

泣いていた女を思い返す。

ありゃ見かけたただけだ。

女は口元を押さえながらゆっくりと起きあがる。布団に尻をついたまま目を閉じている。皺という皺は消え失せ、目の前には、きめ細かい肌。乱れた髪。

女は髪に爪を立てながら俺に問いかけた。

「イマナンジ？」

「八時半です」

「ナンヨウビダッケ？」

「土曜日です」

「アト三〇プン」

女は再び布団に倒れ込んだ。すぐに健やかな寝息をたて、緩やかに肩を揺らしはじめた。

俺はホッと肩を落とす。

目覚めの悪い女なのだ。

俺は酒に吞まれて夜のことなど覚えていない。毎朝メドゥーサに石化されて、必死に昨夜を思い返す。何も疚しいことなどないのに。いやホント。ホントだよ。

たまがわ

“pure”、“産地直送”、“ROONY”、“コーンフロスト”...

俺は列車に揺られながら、色とりどりのシャツにプリントされた文字を無作為に拾う。

幼い君は随分と行儀よくシートに座っていられるようになった。偉いもんだとその頭に手を乗せればやたらと温い。顔を覗き込めば、なんだい、寝ていやがる。

俺は火の玉になった君を抱え上げて、電車を降りた。まっすぐ家に帰ってもよかったのだが、喫茶店に落ち着くことにした。束の間の休息、少々贅沢したい。珈琲を嗜みながら本でも読もうか。遠慮がちに窓際のカウンター席へ向かえば、それは床に固定された丸椅子だった。長居をさせぬ為か、背もたれがない。君を膝に抱えて本をめくるには少々筋力を要する。

辺りを見回せば、若者の一団がテーブルを繋げて談笑していた。その隣に一つテーブル席が空いてたが、眠っている幼子を抱えて入り込むのはやや気が引ける。どんなに五月蠅かろうと、必要な睡眠の間に目を覚ますような君ではない。それでも、男女の一団だ。中には静かにしようなどと気を回す輩が出てくるに違いない。それではお互い居心地悪いだろう。

俺は腹筋背筋を駆使しながら丸椅子でバランスをとる。本を構える。そして、時折、店内の様子を窺った。どこか適当なテーブルが空いたら、背もたれのある席に移ろう。本の内容などまるで頭に入らない。

俺は諦めて本をカウンターに置く。そして、君を抱き寄せて窓の外を眺めた。視線を運べば緑鮮やかな堤防。俺は眉を持ち上げた。

「そうだ」

思わず口につき、珈琲を飲み干す。そして、君を抱えて立ち上がった。トレーを持ち上げれば、笑顔の可愛い店員が手を差し伸べた。

「ありがとうございます」

こっちで片付けるからトレーを寄越せということだろう。俺はその言葉に甘えてトレーを渡す。子連れのいいところは、こんな無精髭を生やした小太りのオッサンであろうと、皆の視線が優しいことだ。涎を垂らした無防備な子供を抱えているのだ。実際、どうしたって悪人にはなれない。

店を後にして、河原へ向かう。昔から河原は好きだねえ。土手に立って、遠くの空を眺める。陽は傾きはじめ、ビルの隙間から覗ける空が赤みがかっている。

俺は君を抱えたままそっと土手に腰を下ろす。そして、そのまま仰向けに倒れた。ようやく背骨の休息。嗚呼。思わず息が漏れる。

ガタゴトと鉄橋を渡る列車の音が響きわたった。すると、列車に目がない君が反射的に起きあがる。束の間の休息は終了。嗚呼。思わず息が漏れる。

君は俺の上に跨がって列車を眺めている。そして、列車が鉄橋を渡りきると、足下を見下ろし、尻に敷いている座布団が親父であることに気付いた。

「川だよ」

辺りにはジリジリと悲鳴をあげる晩夏の蝉の音。不意に君は立ち上がり、大きな榎に吸い寄せられてゆく。俺は慌てて起きあがり、その背中を追いかけた。

草の茂る根本で屈み込むんだかと思えば、何かを摘んで俺に向ける。

「ぬけばら」

蝉の抜け殻だろ。俺はトカゲを見つけて指をさす。

「トカゲだ」

君はそいつを追いかけて始めるが、すぐに大きな看板に頭をぶつけて尻餅をついた。日焼けしてすっかり色褪せた川の地図だった。

君は地図上の川をなぞる。

「ここ行こう」

真っ黒になった指先が辿り着いた川の終着点。

「ここ、海だぞ」

「海だあい好き」

行ったこともないくせに。俺は実際の川へと振り返り、川下の遙か先を指さした。

「ずっと下って行ったら海だよ」

君は川辺へ向かう。海まで歩くつもりだろうか。しかし、川辺に辿り着けば、なんとも魅力的な石塊がゴロゴロ転がっている。小さな手で真っ白な石を摘みあげると、川面へ向かって放り投げた。アメンボが慌てて逃げてゆく。弾ける水面。弾ける笑顔。君は、もっと大きな飛沫をあげようと自分の拳ほどの石を両手で持ち上げた。

俺は適度に平たい石を見つけて、サイドスローから一投。

「よっしゃ！ 三チョピン！」

餓鬼の頃、水切りで石が水面を跳ね上がる回数を「チョピン」と数えた。俺のガッツポーズも意に介さず、君は必死に拳大の石を運ぶ。

今日は土手で君と寝た。そして、川辺で水切りを披露した。実に模範的で有意義な休日じゃないか。君はようやく川辺まで運んだ石を放り込む。大きな飛沫が君の顔を濡らし、二人して笑った。

「そろそろ帰るか。お土産に一個だけ石を持って帰ろう」

君は随分と無骨な石塊を拾い上げた。個人の趣味にケチ付けるつもりはないが、俺は別の石を提案する。

「こっちのほうが良くないか？」

そして、丸み帯びた真っ白な石を小さな手の平に乗せた。君は西日に目を細めて呟く。

「たまご」

そして、それを愛しむようにもう一方の手を重ねた。俺が思いついたことと言えば、実にくだらない。

「たまがわのたまご」

でも、口にしてみると悪くない。やっぱり、もう少し遊んでいようか。俺はキラキラと流れる川面を撫でるように視線を運ぶ。

こういうことにしよう。

「たまがわのたまご」と、呪文を5回唱えたら、思い通りの生き物に変わる。

落ち魚になって川を下るか。渡り鳥になって空に行くか。

いずれにしたって、海まであつと言う間だろう。

宍戸レイン・ドッグ

「饅頭は完璧だぞ」

宍戸は突拍子もない。

「なんだそれは？」

「おまえんこの息子君が教えてくれた」

名前くらい覚えろよ。

「そんなこと言ったか？」

「この前、電話で言ってたぞ。おまえ、頼んでもないのに電話かわるだろ」

「そういうことはビブラートに包んで言えよな」

「うまいこと言うよなあ」

「ビブラート？」

「完璧な饅頭だってよ」

オブラートだという訂正はいただけないようだ。

「しかし、何が完璧だったんだ？」

「知らんよ」

「おまえ、親だろ」

「何を言ってるんだか、半分くらいしか分からんよ」

何故そんなことを口走ったのか。最近、饅頭なんて食ったろうか。

「しかし、言われてみれば饅頭は完璧な気もするよ」

宍戸は突拍子もない。子供の無作為な発言にシンパシーを覚えるのは安易だろう。

「どこがよ」

「きめ細かく裏漉しされた餡だよ。滑らかで艶のある薄皮だよ。どうよ？」

俺は完璧な饅頭を思い描く。それはスーパーノヴァに続いて形成される中性子星さながら確かな質量。それは弾力のある真っ白な球体。それでいて僅かに力を加えるだけで

サクリと二つに割れる。それは限りなく暗黒に近い断面。それでいて粗アントシアニン色素が仄かに赤い光を跳ね返す。

「なんというか、ギョツとしてるな」

俺は呟いた。

「おまえ」 穴戸は言い掛けて一度口を噤む。「なんというか、チョロいな。そんな簡単に共鳴していいのか？」

俺が共鳴したかったのは、おそらく穴戸ではない。不意に笑いがこみ上げる。携帯電話を遠ざけて、咳に変えた。

ところで、小さな液晶画面には「公衆電話」と表示されている。

「おまえ、外から電話してるのか？」

「よく分かったな」

携帯電話に表示されることを知らないのか。

「まあな。雨が降っているんじゃないか？」

「ボックスだから大丈夫だ」

「最近、突発的に降るからな。すぐに止むだろう」

穴戸は、電話ボックスで雨宿りをする羽目になるまでの経緯を話しはじめた。

はじめは傘を持っていたそうだ。雨の中で信号待ちをしていると、自転車に跨がった女が現れた。短いスカートで、ブレーキ音とともに白い脚をヌツと伸ばした。傘は持つておらず、長い髪から雨が滴るほどずぶ濡れだ。

その時、穴戸はある映画のワンシーンを思い出した。

「映画といっても漫画だよ。ボロボロの傘を持った餓鬼が、友達姉妹のために傘を置いて駆け出すシーンあったろう」

「カン太？」

まどろっこしい言い方をしないで、「となりのトトロ」と言えばいいだろう。

「あれを思い出したんだがな。なかなかできんぞ。あれは」

「やらなかったのか」

「やったよ」

「やったのか」

「やったが未遂だ」

「失敗か」

「信号の変わるタイミングを見計らって傘を置いて駆け出したら、俺より速く走っていきやがった」

俺は再び携帯電話を遠ざけて、咳に変えた。

「そりゃ、相手が自転車だからな」

「傘を取りに引き返すのも阿呆みたいだからな。とりあえず追いかけたんだが、いい勢いで振り切られたよ」

「追いかけるなよ。彼女も驚いたろう」

「親切心だよ」

「それで、電話ボックスで雨宿りか」

「ただ籠もるのも NTT に悪いからな。久しぶりに公衆電話というものを使ってみた」

受話器の向こうで電子音が響く。カードの度数が切れたのか。

「何処だと思う？」

「さあな」

「いつもの居酒屋の近くなんだが」

　　そう言い残して、電話は切れた。

　　俺はため息をつく。玄関の傘立てに視線を運ぶと、風呂上がりの細君と目が合った。

「電話してたん？」

「ああ」

「穴戸くん？」

「ああ」

　　俺が電話をする相手など穴戸以外にいないとでも思っているのだろう。残念ながら、まったくその通りだ。彼女は鏡台の前に腰を下ろすと、バスタオルで頭を掻き毟りながら、窓の外を眺めた。

「雨止まないね」

　　俺は口元を歪めて、小さく呟く。

「すぐに止むだろう」

ちやりぽつ

　　俺は便所で肩を並べた同僚に声をかける。

「最近、ダイエットしてんだ」

「歳とってきたら、ちょっと太ってるくらいの方が健康にはいいらしいよ」

　　人一倍スタイルの維持に気をかけているおまえが言うな。憤りを覚えつつも、その言葉に少々勇気づけられる。

「手始めに、平日に酒飲むの止めたんだよな。そしたら朝が楽でさ」

「俺、昔っから家じゃ呑まないけどね」

　　どうもおまえとは会話が續かない。

　　毎晩呑んでた酒を苦い茶に代えた。意外なほどストレスを感じることはなかった。俺には代々の酒飲み遺子も組み込まれている。幾らでも飲めることを自負しながら呷ることもあったが、酒が無くては生きていけないというほど呑み助ではないようだ。

　　湯飲みを口に運び、眉間に皺を寄せて茶を啜る。古館伊知郎にも随分慣れてきたなあ。報道番組をぼんやり眺めながらまた一口。何も無いでは手持ちぶさたになる。それだけのことなのだ。

グラスは湯飲み置き換わった。然すれば、茶と茶の間を埋めるものがあるだろう。酒には塩辛い肴だ。苦い茶にはなんといっても羊羹だ。黒文字といきたいところだがステンレス製のフォークを通して口に運ぶ。二、三噛んでから苦い茶で流し込む。これが美味くて止められない。ダイエット目的の禁酒だったがまったくもって本末転倒だ。

ダイエットの効果はなかなか感じとることができない。それに比べて、朝が楽とは即効性のある確かな実感。酒を茶に、肴を羊羹に代えて嗜むことには十分意義がある。

俺は手洗い場で髪を撫でつける同僚に声をかける。

「最近、羊羹が美味くてさ」

「俺、アンコ駄目なんだよね」

伊勢に出張になった折には赤福でも買ってきてやろうと心に決める。

苦い茶には、饅頭でも牡丹餅でもなく羊羹なのだ。小麦粉や餅米が含まれない分、多少カロリーが抑えられるのではないか。そんなささやかな抵抗心もあるが、それだけではない。羊羹はチョコ菓子で言うところの板チョコだろう。然すれば、羊羹こそ純粋にアンコを楽しむ餡菓子だろうと思うのだ。

ところで、何故ダイエットしようと思いついたのか。

「誕生日になにが欲しい？」

彼女に問われた時、ちょうど仕事とプライベートで兼用できるパンツが欲しいところだった。俺は意気揚々ポールスミスショップに踏み入れた。そして、少々アクセントの利いたパンツを二本持って、いけしゃあしゃあ試着室へ向かったのだ。

折り畳まれたパンツを開いた時、少々嫌な予感はしていた。はじめに左足を差し込む。なるほど。予感は次第に確信へと近づいてゆく。俺は僅かな可能性に賭けて、右足を突っ込み一気に引き上げた。なるほどなるほど。パンツは膝を越えたところで途端に減速。なんとか尻をねじ込んだところでゲームオーバー。姿見にはチャックを全開に呆然とする男が一人。

「いつかポールスミスのスーツが着られるようになりたい」

そう言っていた先輩社員の言葉を思い出した。あんたの給料なら買えないこともないだろうと苦笑いを浮かべたが、なるほどなるほど、お金の問題ではないらしい。

そんなこんなで今夜も羊羹が美味しい。次の休みには銘々皿と黒文字でも探しに行こうか。

とは言え、ダイエットが目的ではじめて夜の嗜みだ。程々にはしておきたい。

「あと一口」

最近では羊羹をフィルムのように薄く削る技術が向上してきた。羊羹はすぐに舌で溶ける。そして、そいつを苦い茶で流し込んだ。

腑抜けを気取って余裕をかます

今日は何だか頭が空っぽになってとてもいい気分だ。テーブルに腰を下ろして、空になった湯飲みを両手で包む。

「おーい」

俺の目の前で女が手を振るう。

「帰ってこーい」

半ば意図的に薄ら笑いを浮かべて、腑抜けを気取る。

「どうしたのよ？」

気弱な俺が久し振りにいい気分で行き先を過ごしているんだ。しばらく放っておいてくれ。

「だめだこりゃ」

女はそう言って席を立つ。食後の器を流しに下げて、誰に言っているのかポツリ呟く。

「夏場の水仕事は嫌いじゃないわ」

世間では秋の気配が話題になりはじめたが、確かにまだまだ暑い。

「暑は夏いなあ」

俺の声は流水でかき消される。女はスポンジにたっぷりの泡を立てて食器をこすり始めた。素麺を食っただけの茶碗をそんなに泡立てて洗う必要があるものかね。海面活性剤が必要になるのは、基本的には疎水性タンパク質や油分をエマルジョン化する場合だけだ。麺つゆが入っていた器など、水洗いでいいではないか。空っぽの頭に理系男の余計な思考が浮かんで消える。

時折、食器の触れあう音が涼やかに響いた。俺は密かにその音から女の温度を測定している。

食器を洗い終えた女は、茶筆筒から茶筒を取り出し、急須の出廻らしに茶葉を足す。俺はその手元を眺めながらふと眉をひそめる。「急須の出廻らし」に違和感を覚えた。急須には出し殻か。出し殻から注がれた茶が出廻らしで、女は急須の出し殻に茶葉を足したのか。理系男は国語に弱いのだと余計な言い訳が浮かんで消える。

続いて、女はポットから湯を注ぐ。

「最近、魔法瓶って言わないよな」

女は首を振らずに視線だけを俺に運んだ。

「いきなり喋り出したかと思えば何よ？」

「さっき、暑は夏いなあって言ったけど」

「は？」

女の温度がやや上昇。俺は小さく首を振る。それでも、女ははじめに俺の湯飲みに茶を注ぐ。その気遣いはとてもいいと思うよ。男なんて気分良くしておけばいいのよ。

湯飲みを包んでいた両手が途端に熱を帯びる。

「っっ」

俺は耐えきれず両手を引いた。そして、ジンジン痺れるその手に両膝に挟みむ。女の勝ち誇ったような視線が俺を刺した。まったく嫌な表情だよ。そのインパクトは空っぽの頭に浮かんで漂う。俺は鼻から大きくため息。湯飲みを持ち上げて茶を啜る。

「っっ」

女は小さな笑みを浮かべながら、自分の湯飲みに茶を注ぐ。わざとだよ。俺はその口元を見届け、小さく鼻を鳴らした。

蕭々たる霖

「しかし、よく降るあ」

前に述べられたことを受けて、それに対立する事柄を述べ始めるときに使うべきしかし。前の話題から逸れることを述べ始めるときに使うべきしかし。

しかし、と、思わず口をついてしまうのは、どちらかと言えば後者かしら。夢と現実の狭間、寝起きの森を抜け出して畳を踏みしめる。薄暗い寝室のカーテンをめくれば昨夜から引き続きの雨じゃん。

某日日曜日、六時一〇分。清々しくもない休日に、何故一人早起きをしたのか。記すほどの理由ではない。昨夜、ハイボールを飲み過ぎて、朝からひどい尿意を催したのだ。

「嗚呼、漏る漏る」

俺は寝室を抜け出して、便所に駆け込んだ。

盛夏の頃は、一八〇ミリリットル缶の炭酸水をネットで箱買いしていた。暑さも和らぎはじめたこの頃、もう箱買いはしなくていいだろう。そして、近所のスーパーマーケットへと足を運べば、炭酸水の最小単位は五〇〇ミリリットルペットボトルであった。ちょっと多いな。しかし、炭酸水の飲み止しなど残しておきたくない。結果として、飲みすぎる。折角の休日だというのに朝から目を覚ます。

昨日の夜は女と寝室で、

「この頃、よく降るよね」

「シューリンだな」

「しゅうりん？」

「秋の梅雨みたいヤツ。なんかそう言うらしいよ」

「しゅうは秋？ りんは？」

雨冠に林だったような。

不意に雨が強まる。アスファルトを打つ水の音が、蛇口を捻ったそのように勢いよく響いた。

「わお」

これってシューリンか？ 語感との違和感に首を傾げる。

「スコールだよな」

朝一番の放尿も同様。

俺は自室に籠もり窓を開ける。

「しかし、よく降るあ」

薄暗い朝の蕭々たる雨は、昨晚の突発的な豪雨に比べるとシューリンの語感に相応しい。本棚に手を伸ばし、平積みされた本の上から電子辞書を手に取る。「SHUURIN」と打ち込めば、やはり雨冠に林。何日も降り続く雨のことを、霖（ながめ）、霖雨などというらしい。

飲みすぎとは言っても、気分は悪くない。ウイスキーを垂らしたハイボールを二つ。残った炭酸水はペットボトルから仰向いて一気に飲んだ。飲みすぎたのはアルコールではない。炭酸ガス入りの水だ。

膀胱に余裕ができると、腹が減った。ダイニングに足を運べば、ガス台の上に鍋を見つけた。

「やあ」

昨晚はカレーだった。カレーの翌朝は実に自由だね。カレーの鍋を火にかける。冷や飯を皿に盛ってレンジにかける。女を起こさずとも、俺一人で飯にありつける。冷蔵庫にはご丁寧に麦茶まで用意されていた。福神漬けを切らしていることに関しては目を瞑ろう。

レンジが電子音をあげた。扉を開ければ、白飯から驚くほどの湯気が立っていた。俺は顔を背けてて、皿を掴む。続いて、鍋を覗けば、思いの外カレーの残量は少ない。鍋の底に張り付いたカレーは既にバクバクと泡を弾いていた。

火を止めて軽くオタマでかき回せば、二人分にはやや足りないか。オタマに一杯カレーを掬い、湯気の立つ白飯に盛る。女の分を少し残しておこうか。と、もう一杯。あいつそんなにカレーが好きじゃなかったよな。と、もう一杯。目を覚ましたら何か適当にやるだろう。と、もう一杯。結局、鍋を持ち上げて、全てを浚う。

白飯が見えなくなるほどカレーが覆い尽くされた無骨なカレーライスができあがる。そいつをダイニングテーブルへ運び、俺は手を合わせた。

「ただだっきます」

茶色いドーム状のそれにスプーンを突き刺す。掘り出された白飯は未だに大量の蒸気を発していた。ひゅうと息を吹きかけてそいつを口に運ぶ。熱さに顔をしかめながら、薄暗いダイニングで無骨なカレーライスを食べる。五口目で飽きがきた。六口目を麦茶で流し込み、俺は立ち上がった。

冷蔵庫を覗けば卵がある。納豆だってあるではないか。大阪の定食屋で食べたように、カレーに生卵を落としてみるのもいいだろう。納豆ならば、タレを混ぜてからカレーに

乗せたい。蕎麦屋のカレー丼が美味いように、カレーには何故か鰹出汁がよく合う。

「いいじゃん」

俺はお多福の面が描かれた紙カップに手を伸ばした。気分はすっかり納豆カレーに寄っていた。この際贅沢にダブルで生卵もかけてやろうかと企むが、ちょっと待て、冷蔵庫のドアポケットに並ぶそれは何時買ったものだろうか。掴んだ卵を何気なく振ってみる。それで何が分かるでもないが、予感が働いて棚に戻す。

納豆を食う度、婆さんを思い出す。関西人ではないのだが、大量に糸を引く納豆を滅法嫌った。泡立つほどかき混ぜようものなら物言いがつく。納豆はタレをまぶしてそっと解すものなのだ。

今では俺もそのほうが美味いと思っている。もともと発酵食品がそんなに好きではないのだろう。アクセントとしてはいいが、発酵感が全面に押し出された納豆を口にするは少々抵抗がある。プロセスチーズはいいけれど青いチーズはちょっと無理。みたいなもんだ。

そして、俺はそっと解した納豆をカレーに乗せる。全面にまぶすことはしない。納豆カレーと素カレーの双方を楽しみたいのだ。できればカレーも白飯の半分くらいにかかっていて、白飯、納豆飯、素カレー飯、納豆カレー飯のカルテットを楽しみたいところだった。

後の祭りの無骨カレー。俺は、納豆カレーと素カレーの両サイドから切り崩していく。最後の一口というところで、納豆付属の練りからしを絞り出し、さらなるアクセント。火照る口内を、麦茶で一気にクールダウン。

「ふう、食った食った」

こみ上げるものを抑えきれず、拳を口元に添えれば、カレー風味のゲップじゃん。

窓の外には蕭々たる霖。

不意に人恋しくなり寢室を眺める。

贗作ロックンロール

「ロックンロールをはじめてから随分経った。気が付けば何でも手の届くところにあった。何だっとうまくやるようになった。それなのになんだい。俺はいつだって考えてしまう。俺がいたあの場所を取り戻さなければ♪」

フォークギターを抱えたオッサンが一人、駅前広場で演っていた。白髪混じりの無精髭を生やしてさ。死んだ目をしたオッサンが一人。何だか珍しいな。

僕は広場のベンチに腰を下ろして、ぼんやりオッサンを眺めている。大きくなったら

何になる？ 自分に問いかけて、ため息をついた。ついに巡ってきた誕生日会。大きくなったら何になる？ 明日はきっとそんなつまらないことを聞かれんだ。今年はどんな素敵な嘘をつこうか。そんなふうにしかな考えられない自分が嫌になる。

去年は天文学者になりたいと答えたよ。星のことを調べる人って何ていうの？ お母さんに聞いたんだ。天文学者かしら？ テンモンガクシャね。あんた星が好きなの？ 別に。変な子だね。

「それはとても長い、とても長い時間の孤独を重ねてきたんだ♪」

本当に本当のことを言えば、とんでもない生き物になって、高層ビルをなぎ倒して、大きな川を飛び越えて、大きな雄叫びをあげてやりたい。それが駄目なら、誰にも追いつけないスピードで自在に空を飛び回るなんてのもいい（やっぱり大きな雄叫びをあげながら）。

本当の夢ってそういうことだと思うよ。

でも、そういうことじゃないでしょ。

「ザ☆ブックオブラブを知ったのはいつだったろうか。愛を知らない俺たちだから、うまくやっていける保証なんて何もない。連れていってくれよ。俺がいたあの場所へ、もう一度、連れていってくれよ♪」

君はいつだって僕を小さな子供のよう、誰にだって見せる優しい目で見つめている。僕の気持ちなら知っているくせに、口にしたら笑ってしまうだろう。

僕もやがていつか大きな大人になって、君の顔も声も忘れてしまえるかな。君は何でも知っているような顔をして、僕を見たなら微笑んでしまう。

「それはとても長い、とても長い時間の孤独を重ねてきたんだ♪」

こうなったら本当に本当の夢を叶えてしまえ。とんでもない生き物になって、高層ビルをなぎ倒して、大きな川を飛び越えて、大きな雄叫びをあげてやるんだ。君は恐ろしくって怖くって泣いてしまうだろう。それこそきっと僕にだけ見せる本物の涙なんだ。ケンイチにも、キキにも、マーヤにも、カトーにも、アンガスにも、ナルトにも、シマちゃんにも、モリゾノにも、ジェイクにも見せたことのない、本物の涙なんですよ。

泣くのは怖い時だけでいいよ。

笑うのは嬉しい時だけでいい。

「月明かりの下で散歩した、あの夜からどれくらい経ったろうか。愛し合ってさ。一つの証を手に入れた。両手を広げなよ。両手を広げてさ、そして、この胸に戻っておいで♪」

それが駄目なら、誰にも追いつけないスピードで自在に空を飛び回るなんてのもいい。君を背中から捕まえてさ、そのまま地面を蹴って飛び上がるよ。やっぱり雄叫びをあげながら、雲を突き破って空高く舞い上がるよ。

「それはとても長い、とても長い時間の孤独を重ねてきたんだ♪」

でも、そんなこと言えるわけがないでしょう。

「それはとても長い、とても長い時間の孤独を重ねてきたんだ♪」

大きくなったら何になる？

シャボン玉と少年と少女たち

ピンクのシャツを着た少女は、遊具にもたれてシャボン玉を飛ばしていた。右手にシャボン液、左手は右肘に添えたまま。時折、蝶々が密を吸うように口にくわえたストローをシャボン液に浸す。そして、たくさんのシャボン玉を風に乗せた。

「なんとも優雅だな」

俺は思わず見惚れてしまう。

もう一人、やはりシャボン液とストローを手にした水色の少女。小麦色の肌をさらして、どちらかといえば活発な印象。世界一大きなシャボン玉を作ってやろうと、好奇心に目を輝かせながらゆっくり息を吹き込む。

「慎重に慎重に」

俺は思わず眩いてしまう。

シャボン玉は少女の顔ほどに膨れ上がる。それを風に乗せようとしたところで、幼い少年が目を丸くして駆け寄った。

「わぁ」

突然割り込んできた可愛らしい驚嘆の声。少女の緊張は解け、大きなシャボン玉が目の前で弾けた。少年はキャッキヤと飛び跳ね、少女の顔は落胆の色に変わった。

でも、実のところ水色の少女はシャボン玉遊びがさほど好きではない。少年を見るなり悪戯な笑みを浮かべた。丁度いい玩具を見つけたとでも言うように、背中を向けて駆けだした。幼い少年は遊びを感知して水色の少女を追いかける。少女は風を踏んで飛び跳ねるように遊具を駆け上がる。続いて、螺旋のスロープを滑り降りた。

「頑張れ」

俺の応援も空しく、幼い少年の足ではとても追いつきそうにない。すぐに水色の少女を見失い、ピンクの少女の前に立ち止まる。

「お姉ちゃんどこ行った？」

少年の問いかけに、ピンクの少女はストローを口から離す。

「あっち」

左手でつまんだストローでその先を指し示すと、すぐにたくさんのシャボン玉を飛ばした。

ビー玉よりは大きく、ピンポン球には足りない。実に程良いサイズのシャボン玉が正確に量産されてゆく。

城を象った遊具の上を笑い声をこぼしながら跳ね回る少女。七色に光を返すシャボン玉で公園を彩る少女。これは彼女たちが意図的に具現化したファンタジーなのではないか。

俺は不意に居心地が悪くなる。ファンタジーにおける俺の役割は何なのか。疲れた右手を眺めれば、クック船長か、ジャファーか、ガストンか。思い浮かぶのは悪役ばかり。その上、乏しい脳味噌に浮かぶのは全てディズニー・ヴィランズじゃないか。でも、いいね、ガストン。ガストンはいいいね。マッチョな自惚れ屋。俺には無い全てを備えている。私利私欲に忠実で愛した女の親であれ馬鹿だと罵る。足はかなり臭い。

無理に共通項を探せば、俺だって人並みに足は臭い。だからということもないが、肩を怒らせて城を模した遊具に足をかける。小さな梯子を登り、吊り橋を揺らす。

飛び跳ねる少女を追いかけるのは到底無理だろう。そこで、俺は幼い少年に照準を定める。熊手のように爪を立て、ゆっくり大きく腕を回しながら少年へ近づいていった。

その異変に気づいたのはピンク色の少女だ。たくさんのシャボン玉に魔法をかけると、途端、意志を持ったように纏わりついた。俺は大きく腕を振り回しそれを払いのける。ガストンなんだか、ピーストなんだか分かりゃしない。

ついに俺は少年を捕まえた。雄叫びとともに小さな体を抱え上げれば、少年の悲鳴が呼応する。すると、シャボン玉は俺の頭上で寄り集まり、大きな固まりとなった。続いて、マシンガンのように次々と降り注がれる。俺は奇妙な泡から逃れようと城の上へ上へと登っていった。そこで、風を切って颯爽と現れるピンク色の少女。

城の最上階に登り詰めたガストンはどうなるか。登り詰めたヴィランはもう落ちてゆくしかない。隠し持っていたナイフを突き出すも、少女はひらりとそれを交わす。そして、バランスを失った俺は転落する。底の見えない地の果てへ何処までも落ちていく。

「パパ」

俺は聞き慣れた声に目を覚ました。

ピンクの少女に張り付いた幼い少年が、心配そうな表情で見つめていた。俺は顔面表情筋が張りつめ珍奇な顔になっていることに気づき、すぐに顔中の筋肉を弛緩させて笑顔浮かべた。

水色の少女は相変わらず遊具の上を跳ね回り、ピンクの少女はたくさんのシャボン玉を風に乗せている。俺は貧弱な想像力を恥じるほかない。

宍戸★★★★★

そして、ついに宍戸は世界を救う。

ちょっと唐突か。でも、なんてのが俺の望んだ世界の在り方なんだよ。

産まれたよ。

それは本当に手放しで喜ぶべきことで、一抹の不安を吹き飛ばすほどの大いなる期待が渦巻く。愛すべき阿呆の誕生に最大級の喜びを表現したい。

なんかやりたいな。

基本に忠実で少し型破り。ルーツを重んじ時代を先導する。涙を堪えて声を張り上げる。悲しくて笑っちゃう。何でも知っている。いつでもふりをする。でもやるんだよ。

一歩外に出れば水たまりに飛び込む。家に帰れば襖に突撃する。ロッキンチェアを漕ぎまくる。木彫りの熊に威嚇する。婆さんに雷を落とされる大いなる阿呆。

なんかくれんのか？

学校にあがれば不味い給食に悩まされ、ハイスクール時代には取り立てて話すこともない。目が覚めれば一四時間もあることにウンザリする浪人生活。一年目の夏にバイクの免許をとった。バイクはカワサキだと言うが買うほどの財はない。二年目の春にギターを買った。鬼のような形相が印象的なエピフォンSG。二浪して三流大学に入学。未だFコードが押さえられない。人生は振り返らなければ笑えない。だから長生きするんだよ。

何も要らない癖しやがって。

「どうせなら、ご長寿世界一で有名になりたいね」

はじめての夢。誰よりも年寄りになって、皺だらけの気色悪い顔で笑ってやる。長生き以外に取り柄のない男が、世界中を見下ろして言うんだ。

「俺が全部許してやろう」

誰も聞いちゃないだろうけどね。

俺は口先だけの男だ。

おまえのパパはまったく天才だったよ。

俺は本気だぜ。本気でそう思ってた。

大抵のメールは大事に取ってある。勇気をくれる言葉たち。俺は携帯電話を握って親指を止めた。ごめん。ここぞという時にいい言葉が思いつかない。素敵な言葉。力強い言葉。優しい言葉。強く握った携帯電話を振ってみる。何も出てきしないだろうと思いきや、なんか出た。

携帯電話にぶら下がった小さなお守り。指先で摘み上げ、そいつに書かれた言葉を呟いてみる。

「コーフクキガン」

家内安全、本願成就、商売繁盛。願いは色々あれど、全て網羅する究極のお守りは「幸

福祈願」だろう。

幸せを祈ってる。

俺は野郎に向けて阿呆のようなメールを送ってみた。

俺は本気だぜ。本気でそう思ってたんだ。

こんな時じゃなきゃとても伝えられない。

キレイゴトは大好物なんだ。綺麗なんだからいいだろう。

そして、いつでも微笑みを。

笑ってりゃいいことある。そう言われても、いいことがあってから笑うべきだろうと否定したくなる。

それでも微笑みを。

世も末さん。

宍戸は言った。

「俺たちの世代は人類の絶滅に立ち会えるんじゃないかって思うんだ。廻りだした破滅への歯車をくい止めるには絶対的な一声が必要で、一つの可能性がロックンロールなんだ。だから、俺たちはバンドを組んだんだろ」

そうだったろうか。そうだったのかもしれない。

「奇を衒うな」

当時、好んで宍戸をそう揶揄した。

「裏の裏だ」

あいつは答えた。

いつだって宍戸は本気を出さない。あいつの本気を俺は知らない。そう思う。

あいつは知っている。

あいつはふりをする。

「心から完璧だと思える一日があったら、死んでもいいな」

突然、何を言う。

「ご長寿世界一が夢だったんじゃないのか？」

「死んでもいいくらい完璧だったら死んでもいいだろ」

「そりゃ、おまえの夢が叶った時じゃないのか？」

「世界一の年寄りになった日か」

「だな」

「そりゃ、死んでもいいわな」

乾杯してくるよ。

そして、俺は一人、暖簾を割ってカウンターに腰を下ろす。

「店長の笑顔は今日もすばらしいね」

「どうしたの？ 宍戸君の真似なんかしちゃって」

俺は両手をすりあわせてその恵比寿顔を拝む。店長は恒例の苦笑い。

「あいつもパパですよ」

店長は細い目を見開き、暖色の照明を跳ね返した。そして、注文も取らずにジョッキに手を伸ばす。多少期待していたことは否めない。

「一個おごりね」

他人の善意は断らない。誰のこだわりだったろうか。俺は有り難くそいつを受け取る。

「大いなる阿呆どもの幸せに」

ジョッキを頭上に掲げ、続いて琥珀色の液体を流し込んだ。俺は宍戸に倣って牛すじ煮込みに握り飯を注文する。

「いい季節になってきたね」

「ですね」

そして、俺は宍戸の言葉を待っている。

エニウェイ

苦手というか興味がないんだよ（と言いたいね）。SEX と VIOLENCE を取り除いたら、インパクトは望めんもんかね。通勤電車で困ってしまうんだよ。その物語は満員電車で実用性がないだろう。照れるだろう。結局、苦手なんだよね。最近になって若者という存在が好きになってきた。唐突に何故かって苦手と若手が似てたから。若者はいい。とてもいいよ。雨を見たかい？ 雨くらい見るだろう。怒阿呆だ。怪我すりゃいい。治癒能力だけが取り柄なんだから。一級河川に向かって携帯電話を投げ込んだことがあるかい？ 大したもんだな。俺にはできなかった。カネが惜しいからね。大抵の若者は貧乏だろう。モノが欲しいだろう。貧乏という現実と物欲を拭い去れない己に敗北。川底には若者たちが投げ込んだ無数の携帯電話。そうあればいいと願う。現実そんなことはないやね。心は繊細なのにカネが惜しいんだよ。物欲が勝るのよ。でもね、若者よ。喉元過ぎれば皆オッサン。やがては人類皆オッサンだ。やがて金ならばある（と言いたいね）。だから、若者よ。日頃から若者が好きだとか考えているわけではない。気色悪いだろう。でもね、若者よ。コンビニの前に屯する君たちを微笑ましく思う。大人だね。余裕とやらを見せつけて悦に浸りたいのかい？ ごめんなさい。恥ずかしい欲望たち。だから、若者よ。いつかゾンビになって総てを崇ろうか。ゾンビは好き（と言いたいね）。なんだか好き（と言いたいね）。好きな俺が好きなんだ。実際に見たゾンビ映画なんてバタリア

ン、バタリアン2 (途中まで)、ワイルドゼロ、以上。バタリアンには参った。本当にお手上げだ。一〇代になったばかりの頃だ。多分親友と呼んでも差し支えないであろうあいつの家を見た。二~三週間ほど苦しい夜を過ごした。二〇歳を過ぎて一人下宿で見たキューブにも参ったけれど、そんなの比ではない。でもさ、いいよね。ゾンビ。今となれば一筋の希望の光だ。なんと人類滅亡までもうすぐだ。それまでにゾンビを現実のものにしなければならない。二五年ぶりノーベル医学・生理学賞だ。ATOMなんかに投資している場合じゃない。人型ロボットだって？ そんなもの人肉で作ればいい。初期化したヒト細胞で作ればいい。地球最後の人類が人肉ロボットに排除される。その時、人肉ロボットは人工物だという自覚を持つだろうか。人肉ロボットは飽きもせずヒト型ロボットを産みだし、やがて排除されることを望むのか。アニマルじゃあるまいし、繁栄なんて興味がないのよ。快樂への飽くなき好奇心、探求心。でもね、若者よ。あのフレディー・マーキュリーだって冒頭から問うた。Is this the real life? Is this just fantasy? 俺もいつしかだらしな身体を全身タイツで包んで高らかに叫びたいの。オペラパートをコミカルにすり抜け、爆音ギターを高らかにかき鳴らすの。そして逃げるように囁く。Any way the wind blows... 照れ隠しかね。恥知らずのロジャー・テイラーは高らかに銅鑼を打つ。そして、サヨナラ、ByeBye、残響とともにフェードアウト。だから、若者よ。Punkの前にQueenを聴くといい。SEXとVIOLENCEを取り除いたら、やっぱりインパクトは望めんもんかね。苦手というか興味がないんだよと言いたいね。

奥付

奥付

Puzzle 文集 5

<https://puboo.jp/book/52077>

著者 : puzzle

著者プロフィール : <https://puboo.jp/users/puzzle/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/52077>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52077>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ

Puzzle文集5

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
